国語科における古典の取扱いについて

―― 特に入門期の古典指導を中心として――

畑　　実・鈴木洋一郎・佐藤クニ子・酒井為久

I

古典の学習は主として読解である。その作品が原文であろうとも，また現代語訳文であろうとも，それらを通して伝統的遺産を享受（読解）し，新しい文化を創造（表現）しながら古典に親しむ態度を養うところにこの教育の方向があると言いうる。そして中学校国語科の目標の一つが広く文学作品等を読む学習の中に，古典を取り入れて言語生活の向上を図ろうとする読解指導に重点を置くのに対して，高等学校のそれにはおのずから内容的にも方法的にも段階や差違がある。即ち後者においては，古典の原文に接しながら「その語句や修辞の意味と用法を理解する」ことや「文語のきまり（かなづかいや文語文法など）」の学習などがその指導内容の主なるものとなっている。従来，中学校と高等学校との古典教育には明らかに断層があった。高校に入学した生徒の多数は，古文や漢文にまず言語抵抗を感じ，一方教師は中学における古典指導の不徹底を訴えるのが常である。これには中学教育の目標に対して研究不足から来る一方的な歎きもあるが，生徒自身は教材が中世の説話や近世のわかり易い小説であっても「原文」という文体に「読み難い」一種のインフォーリイを感じていたためでもあった。実際，生徒は文語調に慣れぬうちから始める漢文の訓読などには相当な困難を感じている。漢字の語句の意味は一応理解できても，この言語系統の異なる漢文の文法を学んだり，またその独特な読み方に慣れることは，外国語の学習と同様のむずかしさがあったのである。そして今まで少なくなってきた古典の授業時間の中で，これらの学習上の困難点を克服して，生徒の興味を高め，関心を深めながら入門期における古典指導をすることは至難のことであった。

この研究では，入門期における古典指導にはどんな問題があるかを追究し，中学校，高等学校を通じていかに指導すべきかを考察しようとしたのである。そしてこれには，中高両校の授業を通して得た経験をまとめ，その関係には十分注意することにした。

II

一．入門期をどこに想定すべきか

中学校の指導要領によると，文学作品を読む学習のため，教材の精選については，第1学年では，「……古典をわかりやすく書きかえた文章……」を，第2学年では，「古典に関心をもたせるように書いた文章，翻訳作品，格言，故事や成語，短くてやさしい文語文……」を，第3学年では，「……現代語訳や注釈などをつけたり書き下したりして理解しやすくした古典……」を用いることを考慮していると言っている。それで文語文を読む第2学年の学習をその入門期と言うこともできるが，注釈と対照的に原文を読み親しむという第3学年を入門期とするのが適切のようである。これは昨年，本校の中3から高2までの生徒全員に対して調査した結果（詳細後述）から見ても一致するものであるが，この想定にはいろいろな問題が考えられる。まず，このごろの生徒は進んで古文を読もうとしないし，またそれに対する興味もうすい。これは高校の入試問題に古文の出題が少ないためとも思われる。そして高校の古典教育が大学入試のために学習意欲をもたせることのできるのと対蹠的ある。次には古典学習が訳文，すなわち現代の文章で読むことが多いので，古文のもつ生々しい語感を十分把握させることができないということである。文学はことばの芸術作品である以上，それに対する感覚を養いつつその内容を味わうことの大切さは言うまでもない。改訂指導要領にある古典乙ⅠⅡの総時間は，古典を含む国語甲，国語乙（乙だけでも8時間ある）とに比べ減少しているので，必然的にその読解力の低下が予想される。また一方，中学校においては，話す，聞くという言語技術に余り多く時間を用いてはいないか。これらは意義のある経験学習の一つであっても，特に第3学年では，それ以上に，深く読み，考える態度を養うときであるから，語句を忠実に読みとるという古文の学習を通してこれらの態度をつくり古典に親ませることも十分に考慮されなければならない。

二．古典学習についての実態調査

古典指導にあたり，生徒の学習の実態を諸テストや調査を通して常に把握しておくことは極めて重要なこ

とである。われわれは，昨年中学3年から高校2年までの生徒全員に対して次の項目について一斉に調査を試みた。中3は入門期，高1はその完成の時期（漢文は入門期）高2はその反省の上に立って学習を深める時期として考察しようとしたのである。

㈠　古典の読書についての調査
　イ．読み親しまれている昔話
　ロ．読み親しまれている作品
　ハ．古典の意義の理解
㈡　古典の学習についての調査
　イ．入門期の想定
　ロ．授業時間への希望
　ハ．文章の読み方
　ニ．文法，文学史の学習
　ホ．朗読
　ヘ．語句の取扱，解釈のしかた
　ト．漢文の学習

調査の方法——

（一）古典の読書についての調査

古典の中で，幼い時から比較的読み親しまれている話を19選び，読書経験とその書かれている作品の知識を通して興味・関心の方向を考え，古典の意義をどのように理解しているかを確めてみようとした。その作品は次のようなものである。

1．いなばの白うさぎ　2．八岐のおろち退治　3．海彦山彦　4．かぐや姫　5．菅原道真と梅と太宰府　6．北山での若紫　7．香炉峰の雪　8．貴族の娘で虫をかわいがった話　9．はちかつぎ姫　10．こぶとり　11．一寸法師　12．弓の名人為朝　13．雀の恩返し　14．禅智内供の鼻　15．五郎十郎の仇討　16．木曽義仲　17．鬼介が島の俊寛　18．那須の与一　19．やじきた

（二）古典の学習についての調査

生徒の古典学習の実態調査が目的で，まず入門期の学年を中2から高1までと仮定してその学年においてどんな授業時間の進め方を希望するか，また古典の文章はどんな形式と方法において取り扱ったのがよいか，更にことばのきまり（文語文法）や文学の流れ（文学史）について授業の在り方を調べた。また朗読から始まる古典の読み（語句の取扱，解釈のしかた，授業時の理解度や鑑賞の深浅，辞典の利用）にも注意し，最後に漢文の学習については，高1，高2を対象として行った。

調査の結果——

（一）古典の読書の調査結果から

かぐや姫，一寸法師，こぶとり，のような国民的説話はこの順序に殆ど全員が読み知り，次いで八岐のおろち，いなばの白うさぎ，海彦山彦のような神話が9割まで読まれているが，菅原道真，若紫，虫めづる姫，木曽義仲，俊寛のような平安時代や鎌倉時代の物語の場合は比較的少数である。また上級になるに従ってその話と作品名との一致が多くなっているがその読書数の差が少ないのは，全体的に古典がこの年令には生活の中で親まれていないと考えられる。また初めは膝栗毛のような滑稽本的なものに興味があるが，しだいにお伽草子のような説話から枕草子のような趣味的な随筆などへ作品の嗜好が移ってゆくのも注目される。

古典のもつ意義の理解についても，大体，「精神文化の遺産」とか「新しい文化創造の基礎」として知っているが，その意義を理解していないものも25%を占めた。単に古い日本語の学習のためとか，入試のためという数も相当あったことなどは考えねばならぬ。

（二）古典の学習の調査結果から

（イ）入門期を中2，中3と希望するものは過半数の141名，高1とするもの61名。高2の中には高1でもよいものが比較的多かった。また不明も69名あったが，その多くは中3の生徒であった。

（ロ）高校では現在の国語甲，乙での古典学習には満足しているが，中3の中では古典の時間を特設して計画的に授業を希望するものが半数近い42名あった。

（ハ）訳文との対照において原文を読むとか，原文を読み筋がわかるよう希望するもの，即ち原文に接しながら読もうとするものが各学年とも多く過半数を占め，訳文や参考文などで古典に接しようとするのは少ない。

（ニ）文法は体系的学習よりも文章中で関心をもつ程度のものを希望し，中学のときからまとまった授業を期待するものは⅓である。品詞では形容詞，形容動詞の活用，各活用形の用法，敬語，係り結びや各種の修辞法などが理解しがたいようである。また文学史の希望も⅓の115名あったが，高2は高1のときでよいとするのがやや多かった。

（ホ）古典学習における朗読の重要さは今さら言うまでもない。自分から朗読すべきとするものが，過半数の175（中3　56，高1　52，高2　67）で，教師の範読後の朗読というのは意外に少なく61名であった。

（ヘ）訳文または注を読めば大体解釈はできるとしているが，解釈文を実際書いて練習するものが高1に43名もあった。中3，高2ではむしろ注だけで練習してゆくものが多いが，高2などは古文に

慣れて来ているためで当然である。文の成分（文法的構成）や指示語などへの注意は乏しい。要するに大体の筋をつかめばよいというのであって，その語句に対して深く考えてゆくという心構えが乏しい。9割以上，古語辞典をもっているが，単語の区分を文中でよく考えて引くような利用法は殆どしていない。

（ト） 漢文に対しては普通の興味で，極端に好悪はない。ただ高1，高2の4割までは困難さを訴えている。理由としては今まで殆ど予備知識がないとするもので，この点，入門期においては現在よりももっと時間をかけて指導する必要のあることを痛感する。また慣れない当用漢字以外の漢字や旧字体，また読みがなや送りがなとともに歴史的かなづかいのため，学習を一層困難ならしめている。

ま と め

要するに，古典学習にあたって次のようなことがわかった。

（イ） おもしろい読みもの，特に説話的作品をなるべく多く原文に親しませるのがよい。

（ロ） 教材の選定には十分に注意し，自然のうちに古典の意義を理解させるのがよい。

（ハ） 入門期は中3とし，古典指導のために時間を特設するのがよい。

（ニ） 朗読する機会をできるだけ多く与え古文，漢文のもつ語調や文体に親しませ，辞典の活用についても考慮されなければならない。

（ホ） 漢文における漢字の読みや送りがなには相当の困難を感じている。

Ⅲ

われわれは従来次のような考慮のもとに古典の指導をなして来たが，これは以上の調査に基づきいよいよ確信を深めた。

1． 古典の現代的意義を確実に理解させよう。

多くの古典に親しまないで，抽象的な論文や解説文だけでは理解できない。中学生の古典の読書指導（本研究の成果は本校紀要第3集で詳細発表）に重点をおき，それに視聴覚教材の利用（日本文学スライドやNHKの「日本の古典」の録音教材）などで関心をもたせつつ，現代文学との比較において自然のうちにその意義を感得させる。また図書館内に日本古典文学全集（現代語訳）を整備して特に古典学習文庫などを新設する。

2． 語法，文字の困難を克服しよう。

辞典の積極的な活用と朗読に十分の時間をかけることである。それによって古文・漢文のもつ独特なリズムを味わわせ興味をおこすことも可能である。文法も「文語文を読むに必要あれば触れる程度にとどめる」とあるが，文語のきまりは十分まとめておかねばならない。現代語と違うことばの国語史的な説明も適時行なうようにする。漢文における文字の困難の克服には訓点のある漢文（ただし，送りがなは省く）を書き取りそれを読む練習を重視している。

3． 古典の世界への関心を高めよう。

古文，漢文に表われている古代の生活については具体的知識をもたせつつ，ものの考え方，住居，食事，風俗，習慣などを理解させ，またその時代に底流する文学思潮についてもわかりやすくまとめる。このとき個人的な好みによって不当な深入りは避けなければならない。例えば，中古文学の女性の心理や中世の随筆の隠遁的な無常観などについては指導上十分の注意が必要である。

次に中学3年に実施して来た指導計画は下の通りである。第1学期は古典の現代訳文に親しませ，夏休に読んだ古典の感想文を書かせ，第2学期の初めグループによる読書会を実施して来た。そして以後次の方法に従い，1時間特設の中で指導を実施した。

1． 文学の流れを時代区分上からはまとめないで，古文読解上参考になる「ことば」の意味などを中心として説明する。

イ．若々しい文学…まこと，清さ，明るさ（上古の万葉，古事記を中心としてまとめる）

ロ．美しい文学…あはれ，をかし（中古の女性の物語や日記，男性の日記，物語や枕草子などでまとめる）

ハ．寂しい，新しい文学…無常観，幽玄（中世の軍記物，随筆，新古今などでまとめる。徒然草については別に説明する）

ニ．楽しい，遊びの文学…通，義理人情，勧善懲悪（近世の俳諧，浮世草子，近松のもの，読本などでまとめる）

2． 作品を読む

イ．説話的なもの…徒然草，宇治拾遺物語

ロ．勇壮なもの…軍記物

ハ．軽い随筆…枕草子

3． ことばのきまりとその歴史

イ．文章の歴史…文語，口語の歴史，位相的にみた国語（武士ことば，女房語など）

ロ．歌体の変遷…歌謡，和歌，俳句など

ハ．文章表現に関係のある語法と修辞

余情，敬語，強勢，婉曲，省略，枕詞，序詞，掛詞，縁語

最後に，徒然草を教材にした古典指導の一例を挙げる。内容はⅠ良覚僧正のこと（45段）　Ⅱ風流のたくみ（54段）　Ⅲ月花のたくみ（137段）の三段でいずれも上欄に原文，下欄に口語訳が対照的に書かれている。5時間の配当でⅠⅡⅢ各1時間後，応用文の練習をプリントで実施し辞書を引きつゝ口語訳，第5時限は全体のまとめとする。ここでは第1時限の授業記録を書く。

①公世（きんよ）の二位のせうとに，②良覚僧正と聞えしは，きはめて③腹あしき人なりけり。④坊のかたはらに，大きなるえの木のありければ，人，「えの木の僧正」とぞ言ひける。この名，⑤しかるべからずとて，かの木を切られにけり。その根のありければ，「切りくひの僧正」と言ひけり。いよいよ腹立ちて，⑥切りくひを掘り捨てたりければ，その跡，大きなる掘（ほり）にてありければ，「掘池（けいけ）の僧正」とぞ言ひける。（45段）

〔注〕

①	**公世の二位**	従二位藤原公世，歌人。兼好より60年余り年長。
②	**良覚僧正**	当時，天台宗の大僧正。
③	**腹あしき**	おこりっぽい。
④	**坊**	僧の住まいを言う。
⑤	**しかるべからず**	「しか（然）あるべからず」のつづまったもの。よろしくない。
⑥	**切りくひ**	切り株。

1．導入

イ．これまで読んだ作品をあげさせる。

―余り読んでいない―

ロ．興味，困難度について聞く。

―普通と答えるのが大部分―

ハ．随筆について文学史上からその例をあげさせ，

徒然草の作品の説明をする。

2．展開

イ．範読2回，2回目は歴史的かなづかいなどに注意させる。

ロ．朗読，各自音読後，指名読を2回させる。

ハ．大体の筋の発表，下の訳文からまとめてもよい。

ニ．下の訳文を黙読させ，おもしろさがどこにあるかを発表させる。

ホ．文の主題を発表させる。生徒は「人の言うことには基礎がない」とか「人の言うことを気にするな」との答が多いが，教師から「大衆とのけんかには僧正は勝てない」とか「ニックネームの心理を通して人間の探究」まで補って説明をする。

ヘ．語句に注意しつつ解釈，上欄と下欄の文とを対比しつつどの語がどの語にあたるか，生徒を指名して進む。

○単語の本来の意味・文脈の中での意味を理解させる。

○助動詞のなり，けり（昔話に多い）や係結びを説明する。

ト．歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めさせる。

3．まとめ　朗読させる。

Ⅲ

中学校における古典教材は29年の「学習指導法」や34年の「中学校国語指導書」によると，いろいろとくふうして読ませるようにしているが，いずれも高等学校の古典教材の取扱いと違い，現代の文章（時には古典の解説教材や参考教材となっている場合もあるが）の中でも有機的に読むように配列されている。しかしそのことは生きた原文の読みを第二にすると見なすことは避けよう。われわれは今まで行って来た調査や指導は十分であると思っていないし，明治以降の作品にさえ，ある距離感をもっている入門期の生徒たちが，高校の古典学習を前にしていることを考えるとき，その指導の困難さを痛感させられるのである。しかし中学校・高等学校を通じ指導要領に示された時間の中で古典の指導計画を定着させ熱情と信念とを以って邁進しなければならない。漢文については述べること少なかったが古典入門期の中3で取扱うことの少ないので今後の問題として残すことにした。大方の御教示を賜われば幸せである。